

登場人物

- 柚木愛美 N体大出身の体育教師 名前と裏腹に可愛くない性格
- 柿沼隆二 クラスのいじめっ子
- 柿沼怜華 隆二のいとこ 成績優秀 美人 クラス委員長
- 空知孝弘 体は大きいが優しくおっとりした性格 いじめられっ子
- 空知研一 孝弘の父 武道の心得がある
- 石井有希 小柄で眼鏡の女子生徒 空知孝弘の彼女

梗概

愛美は体育大学出身の体育教師で、体育面は優れているが、教師としては指導力などに問題がある。担任するクラスには、有力者一族の子供でいとこ同士の隆二と怜華が居るが、二人とも虐めっ子である。隆二はいかにも不良で、あけすけな虐めをするが、怜華はクラス委員長の優等生で影でのいじめが多い。

ある日、隆二が同級生の孝弘を体育の授業時に全裸にした。愛美は無視して授業を行ったが、そこに孝弘の父が通りかかり、隆二に制裁を加え、言い訳をする愛美も全裸にして、隆二とセックスさせてしまう。

一方で、怜華は放課後に、隆二と一緒に、孝弘の彼女を虐め、目の前で拘束したままの放尿をさせる。愛美は復讐心から、体育の授業で性教育と称し孝弘を全裸にさせ、クラス全員の前で射精さ

せ、怜華も助手として、それに協力する。

だが、孝弘の機転で父が教室に乗り込み、孝弘を解放し、反対に愛美を全裸にして、クラス全員の前で、性教育を行う。怜華も、机に拘束されてしまう。それでも、反抗した態度をとる愛美に、さらなる処罰として、隆二に命じてイチジク浣腸をさせる。

それでも屈しない愛美に対し、一箱に二個入った浣腸の、もうひとつを追加するように命じたが、隆二の判断で、その浣腸は怜華に対して使われる。愛美は便意に負け、最後の瞬間に許しを請うが、時は既に遅く、教室で拘束されたままでの公開排泄となってしまう。また、怜華も同様に、クラスメイトの前での排泄の醜態をさらしてしまう。

雌獣の教室 体育教師愛美

プロローグ

空知研一は、何というあてもなく街を散歩していた。

数日前に梅雨が明け、もう、夏の暑さも本格的になりかけている。

研一は非番だが世間は平日なので、暑さのせいもあり、歩道には他の人影など無い。散歩に出たのを後悔するような陽気だ。

中学校の脇を通りかかると、体育の授業のようで、校庭の隅のテニスコートに、一クラスほどの生徒が見える。

研一の息子の孝弘も、この中学校の二年生だ。

偶然でも、息子の授業風景を見ることが出来るならラッキーだと思い、並んでいる中に息子が居るかどうかを眺めながら歩いてみる。

1. テニススコートの出来事

この暑さのせいだろうか。

男子生徒の中には、上半身裸で授業を受けている生徒も、数人見かけられる。

その中に、息子の孝弘らしい姿もある。

体は大きい方だから目立つななどと思いつながら近寄って行くと、ふとその異様な姿に息を飲んだ。

上半身が裸なのではない。パンツも履かぬ全裸なのだ。

幼稚園児でもあるまいし、中学生が全裸で体育の授業を受けている。

そして周囲のクラスメイトも、授業をしている教師も、それが当然のことのように、平然としているのだ。

研一は、門扉を飛び越え運動場に入り込み、テニススコートの金網の扉を開け、生徒たちの後ろから、一群に近づいた。

先生も生徒たちも、研一が近寄って来ているのに気づいてはいない。

先生が説明する声が聞こえる。

「男でも女でも一緒なんです。叩かれれば痛いし、負けたら悔しい。特に球技では、男女差はあまり目立たない事が多いです。トップ選手になれば別ですが、中学生レベルでは、男女差よりも熟練度の差の方が、勝ち負けにつながります。」

どうやら、男女の区別なく対戦させようとしているらしい。

それにしても、その中で何故、孝弘だけが全裸で居るのだ。

研一は孝弘の背後に忍び寄ると、軽く尻を叩いた。

振り向いた孝弘は、「あつ。」と驚いた声を出す。

本当に何も身に着けておらず、股間のペニスもはっきりと見える。

研一は、出来る限りの穏やかな声で、孝弘に問う。

「どうして、パンツまで脱いでいるんだ。」

「それは…」

孝弘は、答えられずに口ごもる。

「どうしたんだ。」

さらに問いかける研一に、言いくそくに孝弘が答える。

「隆二に脱がされた。」

「お前、いじめられてるのか。」

「うん。」

情けないような表情で、孝弘がうなづく。

「ところで、その隆二つてのは、どいつだ。」

孝弘が無言で指さした先には、いかにも不良っぽい風体の、上半身裸の男子生徒が立っていた。

研一は、孝弘が指した男子生徒に詰め寄る。その勢いに気おされ、隆二はすこし怯えたような顔になる。

「おっさん、何だよ。」

虚勢を張って言うてはみるが、どこことなく逃げ腰な様子が分かる。

「俺は孝弘の父親だよ。孝弘をあんな格好にさせたのはお前なのか。」

「ああ、そうだよ。暑そうだったからね。」

「馬鹿なことを言うなよ。暑いからってパンツまで脱ぐ奴が居るか。」

「だって、脱いでるだろう。」

「お前が無理やり、脱がせたんだろう。」

その問いに、隆二はへらへらと笑うだけだ。

研一は怒りが込み上げ、いきなり隆二の喉首につかみかかる。

強気な言葉の割には、体力も弱そうだし、喧嘩や武道が強いわけでもなさそうだ。

ちよつと強めに首を締めあげても、じたばたと暴れるだけだ。

研一は武道の心得があるから、相手の強さは判断できる。片手で首をつかまれただけで、抵抗が出

来なくなるくらいの子供なのだ。

「じゃあ、こんなに暑いんだから、お前も孝弘と同じ格好になりな。」

研一はそう言って、もう片方の手で、隆二の短パンのジャージを引き下げる。

その中のパンツも一緒に、一気に足首まで下ろしてしまう。

研一は、掴み上げた首筋を押しやるようにして、隆二を地面に転がす。

隆二は、絞められた首をさすりながら咳き込んでいる。

その足首から、ジャージとパンツを抜き取り、ジャージを孝弘の方に放る。

「とりあえず、それを履いてろ。」

パンツは、フェンスの向こうの道路に投げ捨てる。

隆二は、ソックスとテニスシューズだけの全裸になってあえいんでいる。

「なんだ、お前のちんこは、孝弘のより小さいじゃないか。」

そう言って笑ってやると、周囲からもくすくすと笑いが起こる。

男子だけでなく、女子生徒も様子をうかがって、笑いながら遠巻きにこちらを眺めている。

柚木愛美は、この学校に来て三年目の体育教師だ。

N体育大学で運動をする傍らで、教員資格を取り、就職する時点で、他の職への道がなく、運良く新卒採用で教師になれた。

子供達を教えるよりは、自分が運動をする方が好きで、部活動などには熱心だが、クラス指導などは苦手な部類だ。

今日の体育の授業は、愛美の担任するクラスだ。

テニスの授業の予定なので、全員をテニスコートに集合させ、後から愛美が行ってみると、孝弘がペニスむき出しの全裸になっている。

暑いので、上半身は体育着ではなくTシャツなどでも良いという事にしてあるし、男子生徒の中には、シャツを着るのさえ嫌がつて上半身裸という者も居た。

それは今までの授業でも容認してきたが、まさか全裸で靴だけの姿で授業を受ける者が出てくると

は思ってもいなかった。

どうせクラスのいじめっ子、柿沼隆二のやったことだろう。

きちんと注意をした方が良さのだろうが、あれこれと指導をしたりすると、授業の時間が短くなってしまう。

言い返されたり、クラスの中での問題にされたりすると、放課後に臨時ホームルームを開いたり、校長や教頭に説明したりと、余計な仕事が増える。

このまま無視して体育の授業だけに専念する方が楽そうだ。

男のペニスを見たことがないわけではないし、クラスの女生徒も、動揺した様子はないのだから、ペニス程度で騒がない程度に自制は効いているのだろう。

孝弘以外への影響は無さそうだ。授業を始めても大丈夫だろう。

まったく隆二にも困ったものだ。あれこれと問題を起こし、こちらの手間を増やしてくれる。

同じ柿沼姓でも、いとこの怜華ならこんなことはしないだろう。

怜華は容姿端麗、成績優秀で、クラス委員長も務めてくれている。

まあ、性格は隆二も怜華も似たようなものかもしれない。

お気に入りの取り巻き数人と、クラスを中心グループを作り、グループ外の生徒を無視したり、陰であれこれ言ったりと、見えない処でのいじめのような事はしているらしい。

柿沼一族は、この地域の有力者で、怜華の父親は市会議員だったはずだ。

隆二の父はPTAの会長職に就いている。

親の七光りではないだろうが、そんなことも二人の性格形成に影響しているのかもしれない。

それにしても、孝弘も隆二などにいじめられるのが情けない。

体格を比べても、真剣に二三発殴り返せば、隆二なんか、二度といじめをしなくなるだろうに。

そんな考え方をするんだから、私も可愛げが無いよね。

愛美なんていう可愛い名前で、ルックスも大人数アイドルグループの後列に並べる程度には可愛いし。

まあ、バストサイズは、ちよつと残念かもしれないけど、体育系の女子にしては並みのサイズで、良いバランスのプロポーションだ。

恋人も過去には何人か居たのだが、性格を理由に仲が悪くなったことも多い。

教員の社会では、まだ性格も問題視されていないから、このまま大人しくして、良い結婚相手でも捕まえたものだ。

体育会系ですつと育つたのだから、仕方ないのかもしれないが、愛美の考え方や判断基準は、強いか弱いかを一番重要視する。

自分より弱い者は、虐げても良い相手で、レギュラーチームのメンバーになれば、補欠は自分に従う者であり、下級生などは、奴隷同様である。

一方で、上級生や指導者は逆らつてはならぬ者であり、その指示は、多少理不尽なものでも、従うことが当然だった。

そんなことをあれこれと考えながらも、授業を進めていた時、なにやら生徒たちの方から、ざわついた様子が伝わってきた。

見ると、孝弘はジャージのズボンを履いていて、隆二の方が全裸になっている。

そして、見知らぬ男が、隆二の方に向かって何か言っている。

隆二が問題を起こすの構わないが、学校外の者を巻き込むのは困る。

それに、隆二が被害者の立場で騒ぎを起こせば、PTAでも問題になるだろう。

ここは上手くまとめなければならぬ。

「どうしたんです。あなたは誰です。」

「私は孝弘の父親ですが。」

「どうして授業中のこの場所に入ってきたんです。」

「いや、外を通りがかったら、孝弘がパンツも履いていない姿だったから、どうしたのかと思つてね。」

「それで、なぜ柿沼くんがパンツを履いていないんですか。」

「こいつが孝弘を脱がせたと言うから、じゃあ同じように脱げと言ったのですよ。」

「あなたは、学校への不法侵入者ですよ。その上で、柿沼くんに不当な行為を行ったのですね。」

「ところで、あなたは誰なんですか。」

「私は、この授業の担当で、このクラスの担任の柚木です。」

「先生だったんですね。」

「柿沼くんとやらに不当な行為とおっしゃりましたが、孝弘への不当な行為については、先生としては、なにか対応していただけたのですか。」

「それは…」

「ともかく、柿沼くんにも人権というものがあります。たとえ、いじめ行為の加害者だとしても、一方的に不当な行為を行って良いものではありません。」

「ほう、加害者の人権には配慮があるんですね。被害者の孝弘の人権とやらは守ってもらえないのですか。」

研一は次第に、この先生に対しての怒りが湧いてきた。

「被害者への犯行は見て見ぬふりで、問題にされれば、加害者側の人権などと言いだすのは、公平さに欠けるんじゃないですか。」

「これは、学校内の問題です。学校側にお任せください。」

「そんな事を言って、責任逃ればかりだから、学校外から干渉されるようになるんですよ。」

「もう、お引き取りください。」

「嫌です。自分の息子がいじめ被害にあつて、それを教師が放置しているのに、知らん顔はできません。」

「だから、加害者にも人権が…」

愛美が、そう口に出した時に、研一はいきなり行動に移った。

研一の拳が、愛美の鳩尾の辺りにクリーンヒットする。武道で言う、当て身（あてみ）だ。

愛美は、直接の攻撃が降りかかるとは思っても居なかったので、それを受けることも出来ず、素直

に意識を失ってしまふ。

「こんな言い逃ればかりの教師には、ちよつとばかりお仕置きが必要なな。」

研一は、そんなことを呟いて、愛美の上半身を抱える。

周囲を取り巻く生徒たちは、成り行きを見守っている。

「おい、お前たちにちよつと良いものを見せてやるよ。この先生、さつき、男も女も一緒なんだつて言つてたよな。殴られれば痛いし、裸にされれば恥ずかしいだろう。本人に体験してもらおう。」

そう言つて、抱えた上半身からポロシャツを脱がす。

その下には、ブラジャーしか付けていないので、ベージュ色のブラジャーが露わになる。

今度は、腰を上げさせるようにしてジャージのズボンを下ろすと、ブラジャーとお揃いのショーツがむき出しになる。

「さて、ここからが良い処だ。特に男子は良く見ておけよ。」

そう言つと、ブラジャーのホックを外し、肩紐を腕から抜き取る。

小ぶりだが形の良い乳房が、白日の下に晒される。

「おっぱいなんか見るのは、自分たちが赤ん坊の頃に飲んで以来じやないのか。」

そう言つて笑つて見せる。

「次は、その赤ん坊が出てくる部分も見せてやる。」

そう言つて、ジャージのズボンと同じようにショーツを足首まで下ろすと、ふたつまとめて、足首から抜き取つてしまふ。

もう愛美は、ソックスとテニスシューズ以外は身に着けていない姿だ。

上半身を研一に抱えられ、脚を伸ばしたままの愛美の秘所は、黒い毛に蔽われて、秘密の部分は隠れたままだ。

「これじゃ、赤ん坊が出てくる処がよく見えないだろう。」

研一は、そのまま愛美の両膝の部分を抱え込み、小さい子供におしっこをさせるような体勢、M字開脚のポーズを取らせる。

「見えるか。ぼかしやモザイク無しのおまんこだ。近くでよく見ておけよ。」

周囲を取り囲む男子生徒たちは、食い入るようにその部分を凝視する。

その外側を取り囲むようにしている女子生徒たちも、視線は一点に集まっている。

男子生徒の中には、ジャージの股間が膨れている者も多い。ちょうど中学生で、性への興味は大きい、実践した経験者はいないのだろう。

研一は、愛美の上半身を地面に寝かせ、膝だけを抱え上げた状態にする。

まだ、愛美は自身の影響から抜け出していないようで、意識を失ったままだ。

「男のものは、パンツを脱げば前に出ていて隠しようがないけど、女の大事なところは、こうやって広げてやらないと、なかなか見えないんだ。ここから、赤ん坊が産まれてくるんだ。まあ、赤ん坊が出来るには、その前にここから種を入れなきゃいけないんだけどな。」

ふと、研一の頭をいたずらな考えが過ぎつた。

「お前たちくらいだと、子供が生まれるなんて、考えも出来ないだろうけど、種を蒔く方には、興味があるんじゃないか。誰か、実演してみたい奴はいないか。」

さすがに、担任の女性教師と、クラスメイト全員の前でセックスをする勇氣のあるものは、居ないのだろう。

「じゃあ、そうだな。ちょうど良い。そこにパンツも履いてない奴が居るから、そいつにやってみよう。」

皆が一斉に隆二の方を振り向く。

隆二もクラスメイトの男子たちと一緒に、愛美の秘所を覗き込んでいてペニスも上を向いている。周囲の者は面白がつて、隆二を前に押し出す。

隆二は、怯えたような表情で、愛美と研一の前まで押し出されてくる。

「ほら、ちんこも、さつきより大きくなってるだろう。やりたい証拠だな。」

研一は、そう言つて、隆二の首筋を後ろ側から押さえ、愛美の体の上に乗せる。

「女子たちも良く見ておけよ。男は興奮するとこんなふうには、ペニスが大きくなって硬くなるんだ。自分がセックスをしたいと思うような状況になるまでは、こういう男に隙を見せるんじゃない。」

ぞ。特に十代の男なんて、やれば何でも良い、多少強引にでもやつちまおう、つて考える奴も居るからな。」

「さて、やれば何でも良いだろう。この先生の穴にお前のちんこを入れてみな。」

隆二も、さつき研一にやられているから、もう逆らう気力は無い。

ペニスも勃起して、雄の本能は目覚めている。

促されるままに、ペニスを愛美の秘所に当て、一気に腰を突き出した。

愛美は、かすかに呻いたが、まだ覚醒はしていない。

このような状況で意識が戻るより、まだ気を失っているふりをしていた方が良いと判断し、そのままにいるのかもしれない。

「目の前におっぱいも有るんだから、それも触ってみな。柔らかくて良い触り心地だろう。揉んだりしゃぶったりしても良いんだぞ。」

隆二は研一の指示のままに、愛美の体をもてあそんでいく。

腰も動かし、周囲の状況よりも、自分の快感の方に意識が行っているようだ。

いきなり挿入された愛美の体も、自然に反応を示し、潤滑液も徐々に出てきているようで、隆二の快感が高まる。

皆に観られていることも忘れたように、夢中で腰を動かし続けたが、やがて、「うっ。」と一言うめき、体全体を硬直させる。

ぐつたりと、愛美の体の上に倒れ込んだ隆二に、研一が訊ねる。

「どうだ、気持ち良かったか。」

隆二は返事も出来ず、ただ頷くだけだ。

「こんなふうには、男は種を蒔く事に夢中になってしまっただけだ。そして、それが終われば、また次の種まきの機会と相手を探すだけになる。女子は気を付けるんだな。」

研一は、皆に向かってそんなことを言った後、隆二に、こう告げる。

「ところで、先生の合意もなくセックスしちゃったんだから、本当なら、婦女暴行、強姦っていうことになる。同級生のパンツ脱がせるのとはわけが違う。立派な犯罪行為だ。」

「だって、あんたがやれって言ったからじゃないか。」

「馬鹿だな。誰かに『人を殺せ』って命令されて、本当に殺したら、やった奴が許されるなんて事はないだろう。そいつは実行犯なんだぞ。」

「まあ、被害者の人権はないがしろにしても、加害者の人権には配慮するご立派な先生だし、学校内での問題だし、加害者は未成年だしな。このまま無かったことにされて終わりじゃないかな。」

愛美はまだ地面に横たわったままだ。研一は、生徒たちに声を掛ける。

「このクラスのクラス委員って居るのか。」

その声に応じて、柿沼怜華が進み出る。

「私が委員長ですけど。」

「じゃあ、委員長さんをお願いだ。この先生をこのまま転がしておくわけにもいかないから、保健室にでも連れて行ってやってくれ。誰か、力のありそうなのを使えば良いだろう。」

「保健室ですね。その前に、先生に服を着せてあげても良いですか。」

「ああ、裸のまままで担いで行くつても問題だろうからな。そっちの奴のパンツも、道路に落ちてるから、それは自分で拾いに行かせる。ちんちんをぶらぶらさせたままな。」

研一は、そう言って笑う。

「それから、委員長さんにもうひとつお願いだ。」

「なんでしょう。」

「そもそも、孝弘が裸にされた事が今回の始まりなんだけど、あんたもそれを見てたんだろう。もう、そんなつまらない虐めがないように、クラスを仕切ってくれないか。」

「私ですか。」

「ああ、あの先生には、そんな気が無さそうだからな。」

「もしも、また何かあったら。それを委員長が見て見ぬふりをしたり、いじめの加害者側になつたりしたら。」

「もしも、そうになったら。」

「そしたら、あんたも今日の先生のような事になるかもしれないな。」

研一は玲華にそう告げると、にやりと笑った。皆に背を向ける前に、研一が孝弘にそつと囁く。

「今日の事は、母さんには内緒だぞ。」

2・放課後の羞恥

「それにしても、隆二もあそこでヤツちやうなんて。」

「まあ、あのおっさんに脅されてだからね。」

放課後、そんな話をしている女子生徒、怜華とその取り巻き、瑛子、美佳、葉の四人。

校舎の前、校庭との間に作られた芝生スペース、いつもこの四人が溜まり場になっている場所だ。

「愛美ちゃんもあそこまでされちゃねえ。」

「これからどうするんだろう。このままウチのクラスの担任を続けるのかな。」

「それよりも、この学校に居られるの。」

「私だったら、恥ずかしくて、生徒の前に顔なんか見せられないわ。」

担任とは言え、まだ三年目、二十才代半ばの若い教師だ。

生徒からは、愛美ちゃんと呼ばれている。

「それにしても、愛美ちゃんのアソコって、あんななんだ。」

「って言うより、女のアソコってしっかり見たことなかったけど、けっこうグロいかも。」

「なに言ってるのよ。あんただってあんなでしょう。」

「ええ、私の、あんなじゃ無いわよ。」

「私、自分のなんて見たことないよ。」

「あれ見たら、アワビを思い浮かべちゃった。」

「じゃあ、あんたのもアワビじゃないの。」

「だから、わたしのは違うつて。」

「どうして、そんなこと言えるの。」

「だから、見たのよ。お風呂に入った時に。」

「どうやって。」

「手鏡を床に置いて、それにまたがったの。」

「やだ。そんなの恥ずかしい。」

「馬鹿ね。自分の体じゃない。」

女が三人で姦しいというが、女子中学生が四人なのだから、話は姦しいどころではない。

当然の事だが、話題は今日の事件だ。

目の前で、担任教師が裸にされ、生徒達に秘所を晒され、さらに生徒とのセックスまで行われたのだから、中学生としては衝撃的な事件である。

同じ女とは言え、まざまざと秘所など眺めることは無い。

自分のものならば、鏡を跨げば見ることは出来るが、他人のものなど、一緒に風呂に入ったとしても、前から見るだけでは、形状など見えるものではない。

それを、わざわざ払げてクラス全員に見せてくれたのだから、好奇心いっぱいの中学生としては、男女を問わずその細部まで観察し、記憶に残したのは当然だ。

「やっぱり、今までいっぱいセックスしてたんだろうね。隆二くんのもすんなり入っちゃったみたいだし。」

「アソコの色や形も、沢山経験すれば変わるって聞いたことがあるよ。」

「だから、あんな貝みみたいになったのかな。」

「色も黒ずんだものね。」

きやー、ヤダー、と笑いが起こる。

担任の教師のセックスの話題だろうが、生徒たちは容赦がない。

「愛美ちゃん、体育大に行ってたんでしょ。そっちの方も盛んだったんじゃないのかな。」

「いろんな運動選手とか居るもんね。」

「レスリングの選手と寝技の練習とか。」

「筋肉と筋肉のぶつかり合いかな。」

自分たちは未経験だが、セックスに関する情報は、あれこれと耳にしているし、好奇心も旺盛な年頃だ。

そこに、柿沼隆二が通りがかかる。今日の一番の話題の主だ。

怜華が声をかける。

「隆二。今日は記念日だね。」

「おめでとう。童貞卒業。」

「相手が愛美ちゃんだもんね。」

「クラスみんなが、証人だよ。気持ち良かったんでしよう。」

隆二も、複雑な表情で立ち止まる。

「まあな。やってみれば気持ち良いもんだな。」

「何をカッコつけてるの。初めてだったくせに。」

「いいじゃないか。おまえらなんかまだ未経験だろう。」

「あたりまえじゃない。」

「このクラスで体験済みなんて、いないと思うよ。あんだだって、ヤルのも初めてだろうし、見るのも初めてだったんじゃないの。」

「まあ、そうだけど。」

「でも、女のおそこって、あんなふうになってるなんて、意外だったな。」

「あんなって。」

「ビラッと唇みたくになって、色もあんな色だったし。」

「そうよね。あたしたちだってちよつとショックだわ。」

「何言ってるんだよ。お前たちだってあんなんじゃないのか。」

「あれは、今までセックスやりすぎてるから、あんなふうにはみ出して色も黒ずんじやったの。私達のはもつと綺麗よ。」

「そうなのか。それなら、その綺麗な処女のアソコを見せてくれよ。」

「何を馬鹿な事言ってるの。百年早いわ。」

怜華が冷たくピシヤリと言うと、瑛子、美佳、栞からも

「二百年早いわよ。」

「三百年だね。」

「私のは千年早いわよ。」

と、からかうように同調する声が帰ってくる。

「そんなに冷たく言わなくてもいいだろう。」

と、苦笑いする隆二だった。

もちろん、隆二だつて実際に見せてもらえるなどとは思つてもいない。

その時、校舎の図書室の窓に映る人影が怜華の視界に入った。

「あそこに居るのつて、石井ちゃんじゃない。」

図書室に居るのは、クラスメイトの石井有希だった。

眼鏡をかけた小柄な娘で、成績も容姿もクラスで上位五人に入る。

あまり周囲の者と群れないで単独行動が多いが、しっかりした性格で、皆から一目置かれ、石井ちゃんと呼ばれ、なにかと頼りにされることも多い。

「石井つて、空知と付き合ってるんだつて。」

隆二が訊ねる。

「みんなの噂だけだね。一緒に歩いてたとか、図書館で二人で勉強してたとか、見かけたつて話は聞くよ。」

「誰かが『付き合ってるの』つて聞いたらしいけど、返事しなかったつて。」

「そういうのつて、違うなら違うつて言うよね。」

「ねえ、ちよつと石井ちゃんをいじつてみたくない。」

怜華が、ニヤリと笑つて、そんなことを言い出す。

「いじるつて。」

「何を企んでるの。」

「隆二も、あんなこと言ってるんだし、処女のアソコを見せてもらうつてのはどう。」

「石井ちゃんのを。」

「やばくない。」

「大丈夫だよ。写真でも撮つて、これをばら撒くつて言えば、逆らえないつて。」

先ほどの出来事の余韻もあり、皆がどこもなくハイテンションで、性的な衝動や疼きも高まつているのだろう。

怜華たち四人に隆二を加えて五人も居れば、力尽くで一人を裸にするくらいは簡単なことだろう。

五人は、楽しい計画を相談するように、石井有希をおびき出す計画を練つた。

図書室に居た石井有希に声をかけたのは瑛子だった。

「ねえ、空知くんが呼んでるよ。石井ちゃんに来て欲しいつて。」

「孝弘くんが。どうしたの。」

「なんかちよつと怪我でもしたみたいだよ。私が部室の所を通りがかつたら、呼び止められて、図書室に石井ちゃんが居ると思うから、呼んできて欲しいつて。」

「怪我つて、なにしたのかな。すぐ行くわ。」

瑛子に誘導されて、有希は部室棟の裏まで連れて行かれた。

この学校では、校庭の隅に体育系の部活動の部室が長屋作りで並んでいる。

校庭の反対側には体育館があり、部室棟と体育館の裏側は、校舎からの死角になっている。

有希が行つてみると、男子生徒が一人うずくまつていて、それを数人の女子が覗き込むように取り囲んでいる。

「孝弘くん、どうしたの。」

有希が声をかけると、女子たちは振り返ってこちらに近寄って来た。

その時、有希は、うずくまつている男子生徒の体格が孝弘と違うことに気付いた。

女子たちは、怜華と美佳、栞だ。

何かおかしいと思つた瞬間、有希の左腕に瑛子がすがりついた。美佳は右手を抱え込み、後ろから体格の良い栞が、胴に両腕を回す。

「何するの。」

慌てる有希の正面から、怜華がゆつくりと近づくと近づく。

うずくまつていた男子もこちらを向き立ち上がる。それは、孝弘ではなく柿沼隆二だった。

「隆二がさ。今日、良い事をしたんだけど、相手が愛美ちゃんだつたから、あんなババアじゃ不満なんだって。」

「あなたも見ただろう。あの黒ずんだようなアソコを。」

「それでね。女は皆あんだって思われると嫌だから、若い処女のアソコは、もつと綺麗なんだよつて言つてたの。」

話を聞いて、有希に恐怖が走つた。話の流れがどうなるかは、想像が出来る。

こんなふうに三人に捕まえられていけば、逃げ出せる可能性も低い。

「だから、石井ちゃんの綺麗なアソコを、ちよつと見せて欲しいんだよ。」

「私たちだつて、自分が見えるわけじゃないし、誰かのを見たいんだよね。」

「馬鹿な事、言わないで。なんで私が見せなきゃいけないの。」

「だつて、さつきは空知のアレをクラスのみんなが見ただろう。だつたら、そのペアのも見せてくれないとね。」

「もしかして、石井ちゃんのアソコには、もう空知のモノが入ったことがあるのかな。処女と童貞だと思つてたんだけど、違ふのかな。」

「私と孝弘くんは、そんなことしてないわ。だからつて何で。」

そんなやりとりが続く間にも、怜華と隆二の手は、有希の体に伸びる。

瑛子と美佳が、腕を押さえながらスカートの裾に手を掛ける。

両側から捲り上げると、有希のショーツが怜華と隆二の目に飛び込んできた。

「白に水玉模様か。可愛いの履いてるね。処女っぽくて良いよ。」

「さて、その中はどんなふうになってるかな。」

「やめて。」

有希は必死で抵抗するが、小柄な有希が三人の力に勝てるはずもない。

怜華の手が、ショーツの縁に掛かり、そのままスリと足首近くまで引き下げられてしまう。

「ダメ。見ないで。」

そんな言葉も虚しく、怜華と隆二の目には、秘所を縁取る黒い茂みが入ってくる。

柚木愛美の黒々としたものとは違って、まだ生えそろうっていないサバナのような茂みだ。

それと同時に、瑛子があるものに気付く。

「あれ、今下げたショーツに、何か張り付いてるよ。」

「やだやだやだ。それは見ちゃダメ。」

「うるさいね。ちよつと静かにしてな。」

怜華はそう言うと、有希のスカートのポケットに入っていたハンカチを丸め、有希の口に押し込む。猿ぐつわを噛まされて、有希は言葉が出せなくなってしまう。

怜華と隆二は、有希の足首からショーツを抜き取り、じつくりとそれを観察する。

ショーツの内側に貼り付けられたナプキンには、経血が滲みた跡がはつきりと見えている。

「あれ、石井ちゃん。今日はアレの日だったんだ。」

「こんなふうに出るんだ。初めて見たよ。」

隆二のそんな言葉に、有希は羞恥で顔が真っ赤に染まる。

「当たり前だろう。お前にはそんなのは無いんだから。女の子は毎月大変なんだよ。」
いかにも馬鹿にしたように、怜華が隆二に向かって言う。

「さて、それじゃ、その血が出てくる処も見せてもらおうかな。」

葉が、有希の体を引っ張るようにすると、両側に居る瑛子と美佳は、腕と同時に脚に手を掛ける。膝の裏側に手を回すと、胴上げでもするように、有希の脚を持ち上げると同時に、両側に引っ張る。

有希は必死に抵抗するが、二人の力には勝てず、無惨にも開脚状態にされてしまう。

怜華と隆二は、正面から有希の股間を覗き込む形になる。

綻びも無く未使用未開封といった風情の秘部が、二人の目の前に広がる。うっすらと生理血がにじんでいる様子も見て取れる。

「これが、処女のおそこのか。やっぱり愛美ちゃんの使い込んだモノとは、見た目も違うよな。」

怜華はポケットからスマホを取り出し、有希の秘所を何枚か撮る。

動画で撮り続けると、手が自由にならないので、画像を撮るだけにしておく。

隆二と怜華に正面から股間を覗き込まれ、抵抗も出来ず、脚を閉じる事さえ出来ない。

有希は、羞恥で真っ赤になりながら、その状態に耐えた。

「愛美ちゃんのと違って、閉じた唇みたいだね。ちよつと血が滲んでるけど。」

「生理って、もつとドバドバ出るのかと思ったよ。」

「馬鹿ね。そんなに大量に出たら貧血どころか、死んじゃうよ。まあ、多い日と少ない日があるんだけどね。石井ちゃん、今日は少ない日なのかな。」

あけすけな会話が有希の耳にも届く。

「その唇を払げれば、中には愛美ちゃんと同じような穴があるよ。隆二。入れてみたいだろう。」

怜華がそんなふうに隆二を煽る。隆二はためらった。

先生とやったのは、大人に脅されたからという言い訳も出来るが、ここで有希とセックスするのは、クラスメイトを強姦するということだ。

しかも男子は隆二一人しか居ない。問題が発覚すれば主犯格とされるだろう。

リスクは大きすぎる。

「どうかな。石井ちゃんも今日で卒業しちゃうかい。隆二も童貞を卒業したんだから、あんただって処女を卒業しても良いんだよ。空知のは、隆二のよりも大きいから、ちよつと小さめの隆

二ので経験しておけば、あんまり痛くないかもしれないよ。」

有希は必死になって首を横に振り、顔色も、恐怖で青く変わる。

隆二はその様子を見て、話を逸らす糸口を思いつく。

「おいおい、そんなに赤くなったり青くなったりして、小便でもしたいのか。ところで、小便ってどこから出るんだ。男のははつきりしてるけど、女のって良く解らないよな。」

「おしっこは、この辺に出てくる穴が有るんだよ。」

怜華は得意げに、有希のその部分を指さす。

「血の出る穴も小便の出る穴も、みんなその割れ目の中なんだな。男のみたいに、ピューって飛ぶのかな。」

「どうなんだろうね。私だって、座って下向けてしか、した事ないからね。きっと石井ちゃんがやって見せてくれるよ。」

怜華はそう言うと、有希に向かってささやく。

「ねえ、石井ちゃん。隆二がおしっこしてる処を見たいって。隆二のものを突っ込まれるのと、おしっこするのを見せてあげるのと、どっちが良いかな。」

とても選べるものではない二択だが、どうしても選ぶとしたら処女を守りたい。

「隆二にやられる方が良いかな。」

有希は必死に首を横に振る。

「じゃあ、おしっこして見せてくれるね。」

有希の動きが停まる。

「どうなんだい。じゃあ、まず隆二に指でも入れてもらおうか。」

怜華が、秘所の入り口を指でなぞる。有希は首を振り続ける。

「じゃあ、おしっこするね。」

有希は覚悟を決め、首を縦に振る。

「じゃあ、ここで、このままの格好でやってね。」

瑛子と美佳は、有希のスカートが濡れないように、後ろの部分も持ち上げる。もう有希の下半身は丸出しの状態だ。

「さあ、準備はOKだよ。」

怜華にそう言われても、こんな状況で排泄など出来るものではない。

「あれ、出ないのかい。やっぱり隆二に入れてもらう方が良いのかな。」

怜華はそう言つて、再び有希の割れ目を指で弄る。

有希は泣きそうになりながら、下半身に力を込めていく。

有希の体から勢い良く噴き出した小便の飛沫が、逃げ遅れた怜華の指先にかかる。

怜華は、汚れた方と反対の手で、スマホを隆二に渡す。

「これで小便の様子も撮っておきな。」

隆二は素直に指示に従い、一步下がつて、その様子をスマホに収める。

「いきなり出すんじゃないよ。手に掛かつちやつたじゃないか。汚いね。」

怜華はそう言うと、有希の口に押し込んであったハンカチを取り出し、それで丁寧に指先を拭う。

隆二と怜華のしている前で、有希の秘所から噴き出した小便が、放物線を描いて、地面を叩く。

やがて、放物線の弧が小さくなり、雫を数滴したたらせ、排泄は終わった。

部室棟裏の舗装もされていない地面に出来た水溜まりは、乾いた土に染み込むのと暑い気候で蒸発するので、すぐに小さくなりはじめ。

有希は、羞恥と屈辱で、数滴の涙を浮かべている。

「さて、お腹もすつきり軽くなつただろうし、隆二のもので開通式かな。」

怜華はさらに有希を追い詰めるように言った。有希は、意を決して怜華を睨み返す。

「これ以上やったら、訴えるからね。」

「へへえ、先生に言いつけたつて、どうせここの校長は何にもしないよ。事なかれ主義で、自分の立場が可愛いだけの小心者だからね。」

「誰が、校長なんかあてにするもんか。お医者さんに行って、レイプされたつていう診断書を書い

てもらって、警察に行くよ。犯罪として捜査してくれるだろう。校長だって教育委員会だって、安泰じゃなくなるさ。」

「そしたら、あんたのアソコの画像が、みんなに公開されるよ。」

「構わないわ。私だってSNSで大騒ぎしてやる。市議会議員の娘とPTA会長の息子にやられたってね。それだけじゃなくて、テレビ局と新聞社にも情報を流して、ニュースにしてもらうから。」
そこまで開き直られては、隆二と怜華の方が立場が弱い。

市議だとか会長だとか、役職がある方が虐めの加害者では、親にまで影響が及ぶ。

二人がちらつと眼を合わせる。

隆二は最初から強姦までするつもりはない。

「うるせえ奴だな。誰がこんな小便臭いまんこに突っ込むもんか。」

「しょうがないね。隆二が降りたら、私らには突っ込むモノは無いからね。」

瑛子と美佳と葉が、有希を地面に下ろす。

五人が立ち去った後も、羞恥と屈辱と安堵が入り混じった複雑な思いで、有希はしばらくそこから立ち上がることも出来なかった。

3・雌獣の教室

テニスコートでの出来事から、二日ほど愛美は学校を休んだ。学校内では様々な話が飛び交った。校長と教頭はじめとして、教師たちの耳にも話は届き、校長と愛美とで何らかの話し合いが持たれたようだった。

職員たちも臨時の会議を行い、今回は何事もなかった事として、事態の鎮静化を図る方針で一致した。

教師たちは、生徒の噂話や、学校外への漏洩を禁止した。

そんな中で、愛美は何事も無かったような顔をして、学校に復帰した。

ちようど週明けで、あと一週間もすれば、夏休みになるという月曜だった。

孝弘たちのクラスの、その日の最後の授業は、愛美が担当する体育だったが、愛美からは、教室で座学をすると告げられ、体育着に着替えず、制服のまま教室で待つように指示があった。

教室は一階の一番端、体育館に続く渡り廊下の脇だ。

休み時間には体育館で遊べると思っていた生徒たちも、制服のままではちよつと勝手が違って、残念そうだ。

朝のホームルームの時間にも顔を見ているが、愛美は生徒たちと顔を合わせても、何事もなく、先週のテニスコートでの事は夢だったかのような様子でいる。

だが、チャイムが鳴り、教室に入ってきた愛美の視線には、何か狂気じみたものが混じっているようにも見える。

「今日は、班ごとに机をくつつけてください。ちよつとした実習をします。」

机がくつつけられ、それぞれが席に着くと、愛美が口を開く。

「先週、あなたたちは性教育の実践を見ましたね。今回は、その続きです。」

男子生徒たちが、何かを期待したような顔で、にやにやと笑う。

「今回は、女子を重点的に教えますから、男子は期待しても駄目よ。」

「男子で良い思いをするのは、サンプルになった一人だけね。」

そういうと、孝弘の方を見る。

「サンプルは、空知くんをお願いしたいと思います。」

「空知くん、ここに来てくれる。」

睨みつけるような愛美の視線に、孝弘は逆らう事も出来ず、愛美に指示された中央の机に近づく。机が班員の人数分寄せ集められているので、ちようど人が横たわるくらいの広さが出来ている。

「じゃあ、性教育のサンプルですから、服を脱いでくれるかな。」

「ここですか。」

「そうよ。先週もテニスコートで服を脱いでたでしょう。あれと同じ格好になって欲しいの。」

「そんな。」

「大丈夫よ。もうクラスの皆も、一度は見ているんだから。」

怜華は、困った事になったと思った。先週、孝弘の父から言われた言葉が脳裏に浮かんだ。

だが、「先生」と言いかけた言葉は、結局は発することが出来ないままだった。

愛美の表情は、何かを思い詰めたような、危険な顔つきだったのだ。

今回は先生が先頭に立って、孝弘を脱がせているんだから、クラス委員長の私の責任じゃないわ。そんな言い訳が頭に浮かぶ。

愛美は、孝弘のワイシャツを脱がせ、その下のランニングシャツも剥ぎ取るようにすると、ベルトに手を掛け、制服のズボンを、その中のパンツと一緒に、一気に足首まで下げてしまう。

孝弘は抵抗しようとするが、愛美の勢いと視線の呪縛には抗えない。

「じゃあ、そのまま机の上にあおむけで寝て頂戴ね。」

そう言いながら、手首を握って誘導し、孝弘を横にしてしまう。

「さて、今回は女子向けに、男子の性の様子を解説します。みんな、こっちに集まってください。」
女子生徒は、愛美の指示に従い、孝弘の周囲を取り囲むように集まる。

その外周に男子生徒も来て、二重の輪を作る。

「これが、男の子のペニスです。この先端からおしっこが出ます。そして、もうひとつ大事なものは、ここから精液というのも出ます。」

「おしっこは、生まれてから死ぬまで、毎日何度も出ますが、精液は子供を作るためなので、小さい頃は出ないし、歳をとっても出なくなるの。」

「中学生だと、体はもう大人だから、精液は出ます。出る時には気持ちが悪くなるから、何度も出したくなるの。」

「本来は、女性の子宮に精液の中の精子を送り込むためだから、膣に入れやすいように、ペニスは大きくて硬くなるの。セックスしたくなつて、興奮すると、そうなります。」

「さて、孝弘くん。あなたのペニスは、まだ硬くなつていませんね。ちよつと勃起させて見せてくれるかな。」

そう言つて、愛美は笑う。

もちろん、こんな状況でペニスが勃起するはずもない。孝弘のペニスは、縮こまつたままだ。

「一人で、エッチな本を見ていたりすると、すぐに硬くなつて、ちよつと自分の手で刺激してあげれば、精液も出たりするものなのですけどね。ここでは無理なのかな。」

「誰か、手伝つてあげてくれないかな。」

まさか、クラスメイトを勃起させる手伝いをする女子生徒などはいない。

何人かは、訳知り顔で石井有希の方をちらちらと眺めるが、有希はその視線を感じていないのか、無視を続ける。

「じゃあ、代表してクラス委員長。ちよつと手伝つてくれない。」

愛美は怜華の方を見つめる。

ああ、先生はあの時、保健室に運んだことで、私になにか、思う処があるんだ。

怜華は、ふとそう思った。

「手伝うつて。」

「ちよつとね。そのペニスを触つてあげれば、すぐに大きくなるわ。」

「やだ、そんなこと。汚い。」

怜華が答えると、教室内でくすくすと笑いが起こる。

「もつと大人になれば、恋人のペニスを触つてあげるくらい、当たり前のようにするんだけどね。膣に入れるだけじゃなくて、口に含んだり、舐めたり、いろんなことをするようになるのよ。」

「だって、孝弘は私の恋人じゃないし。口に入れるなんて、汚くて死んじゃう。」

露骨な拒否に、しばし愛美も考える。

「じゃあ、指一本触れなくていいから。ちよつとスカートの中を見せてあげるとか、してくれないかな。たぶん、それだけでも男の子は興奮すると思うの。」

「みんなの前で、ですか。」

「そうね、他の男の子たちも勃起したら困るわね。この机に上がって、空知くんの顔を跨いだら、空知くんだけに見えて、他の人には見えないわよ。それでお願い。」

怜華はちよつとためらう。別に下着を見せるくらいなら、構わないかもしれない。

今日履いてきたショーツはどんなのだったっけ。

偶然にもお気に入りの一枚の、わりと新しい白くて可愛いやつだったはずだ。

先生にこれだけ言われてるんだし、孝弘一人だけに見せるくらいじゃ、大丈夫だろう。

隆二にでも見せれば、色だの形だのあれこれと言われ、からかいのネタにされるだろうが、孝弘なら安全だろう。

愛美に促され、机に上がり、孝弘の顔の両側に足を置く。

スカートの中のショーツを下から見られていると思うと、ちよつと恥ずかしい。

孝弘は、そんなやりとりの間、なにも出来ず、机上に横たわったままだった。

身動きをしようにも、愛美が両の手首を押さえているので、うつぶせになることも出来ない。

でも、こんな状況で勃起などすれば、次はそれ以上に恥ずかしい何かが待っているだろう。

そう思っただけだが、怜華が顔の上に立ち、スカートの中のショーツが、はっきりと見えるようになる、意思に反して、ペニスは大きく硬くなり始めた。

「ほら、見てね。委員長の下着を見ただけでも、ああやってペニスが勃起してくるでしょう。中学生くらいの男の子は、ちよつとしたことでもエッチな妄想をして、あんなっちゃうのよ。」

そうやって、からかうように、愛美が説明する。

恥ずかしいという思いは、逆効果を生み、さらに勃起は加速する。

「あんなになっちゃった。誰か触ってみたい人居る。」

愛美は女子生徒たちに声を掛ける。さすがに志願者は居ない。

「先生、もつと興奮したら、もつと大きくなるんですか。」

「あんなに大きくなって、あそこに入るんですか。」

などと、いくつか質問が飛んでくる。

「大きさは残念ながら無限じゃないのよ。それぞれ生まれ持った大きさが決まっています。女子の胸の大きさをみたいなものかな。」

「たぶん、あの大きさが空知くんのサイズなんでしょうね。あのくらいが標準的なサイズなのかな。あそこに入れる時には、受け入れる側も伸縮性があるから大丈夫ですよ。」

男子からも、あれこれと冷やかしの声が飛ぶ。

「委員長のパンツモロ見え、うらやましいな。」

「手が自由になったら、あそこに触りたいだろうに。先生、手を放してやれよ。」

「それよりも怜華。もつと腰を下ろして目の前に持って行ってやったらどうだ。臭うくらい近くにさ。」

隆二からもそんな声が掛かる。怜華は思わず、それに答える。

「馬鹿。あたしのあそこは、臭ったりしないよ。薔薇の香りがするんだから。」

クラスの中で、再び笑いが起こる。

「じゃあ、もつと近くで拝ませてやったらどうだい。膝を着くくらいまで腰を下げてさ。」

そんな隆二の挑発に、怜華はその気になってしまう。

怜華が腰を下げ膝をつくとき、孝弘の顔面は、すっぽりと怜華のスカートに蔽われる。

何の匂いなのか、今まで経験のない香りも漂ってくるし、シヨーツの生地を透かして、怜華の秘部が見えるような気もしてくる。

孝弘のペニスは、最大限に膨張し、硬さもマックスになっている。

先端からは粘液も滲み、もうクライマックス寸前だ。

ちよつとでも刺激を加えれば、射精してしまうだろう。

愛美は、射精までさせて実践教育としたいと思っていた。

もちろん、先週、孝弘の父から受けた恥ずかしい思いの復讐として、孝弘をいたぶる事が大きな目的だった。

さて、どうやって射精まで持っていこうか。

自分でペニスを握らせてマスターベーションの実演をさせようとも考えていたのだが、怜華が膝をついているから、頭上に挙げさせた手を自由にして自分のものを握らせることも出来ない。

その時、怜華が気付いた。

孝弘の顔に跨っているという事は、孝弘のペニスを一番近い位置で見ているのだ。

しかも、そのペニスは上を向いて反り返っているから、怜華の顔の方を指している。

もしも、この状態で発射したら、怜華の顔が上半身に精液がかかってしまうようなポジションだ。

先日の有希の小便が手にかかった記憶も蘇る。

「やだ、これ、私の方を向いてる。」

そう言っつて、孝弘のペニスを握り、横に向けようとする。

握ってみると、硬いとは言っても、金属のような冷たさは無く、ある意味で握り心地の良い大きさと硬さの肉棒だ。

「へえ、触ってみるとこんな感じなのね。」

先端からは、何か粘液のようなものが出ていて、ちよつと粘ついた見かけになっているが、肉棒自体は、触っても不潔な感覚は無い。

しかし、自分の方を向いたペニスを、横に向けようとしても、手を離すとまた元のように怜華の方を向いてしまう。

「それは、勃起した時には仕方ないのよ。その下にある袋なら、柔軟性もあるだろうから、好きな方向に向けられるでしょうけどね。」

「下の袋ですか。」

「そう。ペニスの下にぶら下がっている袋。中に睾丸が入ってる陰嚢っていう袋よ。一般的にタマツて言われているのが睾丸っていう精子を作る役目をしてるものよ。」

「やだ、毛が生えててグロテスク。」

そう言いながらも、好奇心に負け指先でつついてみる。そう言えば、ここはとても痛いんだっけ。以前、隆二が

「女には分からない男の痛みだ。」

なんて言っただけだ。

「ここって痛いのに。」

そう言いながら、爪で軽く弾いてみる。孝弘は、それに反応して身をよじらせる。

そんな反応に好奇心を刺激された女子生徒たちが数人、机の周囲に近づいてくる。

怜華と日頃一緒に行動をしている瑛子や栞などの取り巻きで、他の生徒たちに対しての虐めをやっている側の者たちだ。

孝弘の顔は、怜華のスカートに蔽われているので、孝弘からは見られていないという安心感があるのだろう。

サイズは違うが、理科の実験でカエルの解剖を眺めているような感覚なのかもしれない。

怜華と一緒にあって、孝弘のペニス付近をつついたりしている。

「ほら、握ってみなよ。面白いから。」

「きゃー、触っちゃった。」

などと、玩具で遊ぶようなノリで孝弘をいじる。

石井有希は、心配そうにちよつと離れてその様子を見ていた。

しかし先生の様子も、今までの経緯も、普通の授業とは違っているのです、うかつに制止すると、もつと事態をややこしくしてしまうかもしれない。

まして、先週怜華たちにあんな酷いことをされたのだ。

孝弘の事も心配だが、自分の恥ずかしい画像が公開されるのも怖い。

孝弘は、いじられる感触で射精しそうになるのを、必死でこらえる。

この状況で射精までさせられては、この先どんな扱いをされるのか、悪い想像が駆け巡る。

それに、有希の見ているところで、そこまでされるのは辛い。

「こっちは、こんなふうにしたら気持ち良いのかな。」

「私のパンツを間近で見て、こんなになってるんでしよう。」

怜華は、そう言いながらペニスを握り、二度三度とペニスをしごいてみる。

「ほら、ほら。こうするともっと気持ち良いかな。」

怜華は、獲物をいたぶる雌の獣のように、自分の下に組み敷いて、身動きも出来ない孝弘に対して、サディスティックな気分で、攻撃を加える。

しかし、さりげなく見えるその動作は、孝弘に限界を越えさせた。

「ああ」と呻き声を上げ、ペニスの先端から液を放出させてしまう。

怜華は、反射的にペニスを横に向け、自分にかかるのを防ぐ。

周囲で眺めている女子生徒たちから「キャッ。」というような悲鳴が上がる。

発射された精液は、放物線を描き、机の隅に落下する。

「出ちやいましたね。この白くて粘り気のある液体が精液です。この中に、精子が含まれていて、それがあなたたちの体の中にある卵子と結合すると赤ちゃんになるんです。」

愛美は、冷静に解説を続ける。

「男の子は、出しちゃえば気持ち良くて、それつきりだけど、女性は体の中で赤ちゃんが出来て、子供を産むことになりますからね。むやみに精子を入れさせちゃ駄目ですよ。もしもセックスをするなら、妊娠して良い状況になるまでは、避妊具をきちんと使わなけりやね。」

「先生。この前、隆二君と…」

誰かが、そんな疑問を口にする。

「あの時は、運良く妊娠しない時期だったの。もしも柿沼くんの精子が入ってきても、卵子が準備出来ていなければ、妊娠はしないのよ。それは生理の周期から計算が出来るんだけど、計算が狂う時もあるから絶対とは言えないの。だから、確実な避妊にはならないの。気を付けなきや駄目ですよ。」

「この液をプレパラートに採って、理科室の顕微鏡で見れば、おたまじやくしのような形の精子が動いているのが見えますよ。誰かやってみたい人は居るかな。」

孝弘は、相変わらず手首を押さえつけられ、顔面には怜華が跨ったままだ。

クラス全員の前で射精させられた羞恥で心の中は乱れているが、愛美はそんな事にはお構いなしで説明を続ける。

その時、教室の扉が静かに開いた。

皆が孝弘を囲んでいて、気づかないうちに、足音を忍ばせ、研一が教室に入ってきた。

研一は、愛美の背後に忍び寄ると、穏やかに声をかける。

「また、こんなことをやってるのか。しかも、今度は先生が首謀者なのか。」

その声に驚いて、愛美が振り返ると同時に、前回と同じように、当て身が鳩尾に入る。

今回は愛美もとつさに腹部を硬くして、衝撃を受け止めた。しかし、研一の打撃は強力だったらしく、半ば意識を失いかけてふらふらとしている。

研一は、背負っていた登山用のザックからザイルのようなものを取り出し、すばやく愛美の手首を結んでしまう。

長いザイルを、取り出した登山用ナイフで切ると、次は足首を縛り、愛美を教卓の上に寝かすと、手首のザイルと足首のザイルを、教卓の足に結ぶ。

そうして、愛美を身動き出来ないようにしてしまうと、手にナイフをもったまま、怜華の方に向き直る。

4・双臀開華

「さて、お嬢さん。クラス委員長さんだったね。先週、言ったことを忘れてはないだろうな。」
その言葉は、怜華に恐怖を与え、体をすくませる。

しかも、研一の手にはナイフが握られている。怜華は、机の上で立ちすくんだまま、動けない。研一にしてみれば、ナイフは登山道具のひとつで今回はザイルを切るために使っただけのものだ。こんな中学生程度なら、戦うにしても素手で十分に勝ち目はある。

ナイフなど、単にそこに置いたりザックに戻したりする手間が面倒で、手に持っているだけだ。だが、見ている者からすれば、ナイフというのは凶器であり、それで切られる可能性は常に考慮の内だ。

「孝弘をサンプルにしてお勉強したんだから、今度は委員長さんがサンプルになる番かな。」

研一はそう言いながら、怜華に近づく。

「止めて。それだけは許して。」

「そうだな、先生のお手伝いをしただけなんだから、全部脱がせるのは可哀そうかな。じゃあ、スカートは履いたままで、中のパンツだけ脱いでもらおうか。」

研一の言葉に従い、怜華はスカートの下のショーツを下げる。

スカートが捲れ、中身が見られないように、注意深く足首から抜き取ると、小さく丸め手のひらに隠す。

クラスメイトの視線は、机の上で始まったストリップまがいの出来事に、集中している。

「そしたら、そのパンツで、さつき孝弘が出したものを、きれいに拭き取ってくれないか。この机の主だって、こんなのを放置されちゃかなわないだろうからな。」

なんで私が、と思いつつも、ナイフと研一の視線に怯え、怜華は自分のショーツで、孝弘の精液を拭う。

お気に入りの一枚だったのに、こんなになっちゃったらもう履けないと思うと、ちよつと残念だ。

「さて、さつきの孝弘と同じ格好にしても良いんだけど、それもあんまりだから、服を着たまま、そこに横になつてもらおうか。」

この言葉にも、怜華は逆らえない。孝弘が今まで居た場所に、同じように体を横たえる。

研一は、怜華の両手首を上へ上げさせ、ひとまとめにして縛ると、それを机の脚に結んでしまう。

そして足首にもザイルを掛け、右足は右に、左足は左にそれぞれ机の脚に固定する。

これで怜華は漢字の「人」という形にされてしまった。

「こんなことして、何するつもり。」

怜華が怯えたように叫ぶ。

「何もしないさ。どうなるかは、これから考える。委員長さん次第だな。」

じたばたと手足の拘束を外そうともがくと、足首のザイルが、少しづつ上半身側にずれていく。

「そんなに暴れて膝を立てると、スカートがずり上がったりして、中身が丸見えになるぞ。」

研一に笑いながらそう言われ、怜華はふと周囲を見回す。

足首は左右に開かれ、膝を閉じることが出来ない。

足元側にいる者たちがその気になれば。玲華の秘所は覗かれてしまう。

慌てて、立てた膝を戻そうとするが、今度はザイルが戻らず、膝は立てたままになってしまう。

膝下まであるスカートが、これ以上ずれれば、本当に惨めな姿をさらすことになるだろう。

先週、石井ちゃんにさせたのと同じ格好になってしまう。玲華はそう思って、暴れるのをやめた。

「お前たち。こうやって委員長さんを眺めてるのはいいが、指一本さわつちや駄目だぞ。この前、先生にしたようなことはさせてやらないからな。」

「それから、ザイルをほどいて助けてやるのもダメだ。ちよつとの間、この格好で反省してもらおう。もしも、委員長を助ける奴が居たら、代わりにそいつにこの格好になってもらうからな。」

誰も、そんな危険を冒してまで、怜華を助ける者は居ないようだ。

それどころか、男子生徒からは、こんな質問が飛ぶ。

「さわるのはダメだけど、団扇で扇ぐのは良いんですか。」

もちろん、どこを扇ごうとしているのか、魂胆は見え透いている。

この機会に、怜華の秘所も眺めてみたいのだ。

「それは、各自の判断でしょう。後で委員長さんに恨まれても知らないからな。」

「止めてよ、そんな事。」

怜華の願いを聞き入れることもなく、数人の男子生徒が、団扇でスカートに風を送る。

周囲で眺めている女子生徒も、ことさら怜華に同情して、制止する様子もない。

実は怜華は気づいていないが、その団扇で扇ぐ男子生徒数人の中には、隆二の姿も混じっていた。隆二は、美人で聡明ないところである怜華を、同じ親族として誇らしく思う反面、何をやっても怜華には敵わず、同学年でもあるので、親戚の中では常に比較される劣等感も持っていた。それに、怜華自身からも、

「あなたは私には勝てない。」 「馬鹿。」 「愚図。」

などと、様々な場面でなじられることも多く、このように怜華に対して優位に立てる機会など、千載一遇のチャンスだったのだ。

今後は、

「俺は、怜華のあそこを見たことがあるんだぜ。」

などと言えば、怜華が黙るだろうことは予想ができた。そんな機会が運良く訪れたのだ。数人の男子生徒は、お遊び感覚で、怜華のスカートを下側から扇ぐ。

怜華は、股間に涼しい風を感じて、悪い想像を膨らませる。

しかし、男子たちの思惑の通りにはならず、スカートの裾は膝を越え、太ももの途中辺りでその動きが止まってしまふ。

手繰り寄せられるように折り重なった生地で、その先まで行けなくなったのだ。

しかも、生地が何重にもなっているの、肝心の処には光が当たらず、暗い部分の中心に、何かがぼんやりと見える程度だった。

だが、男子生徒たちにしてみれば、それでも十分に刺激的な眺めだったようだ。

「おい、委員長のあそこが見えるぞ。」

などと口にする。怜華は、

「止めて。見ないで。」

と、懇願するが、それで見るとを止める者は居ない。

研一は、そんな騒動に背を向け、愛美の方に向き直る。

「さて、先生は先週のお仕置きでも懲りなかったようだな。先週も生徒たちに御開帳したし、もう二度目だから慣れてるだろう。」

「こんな事して、許されると思ってるの。」

「もちろん、許されるさ。先週だって何のお咎めも無かっただろう。生徒をサンプルにして性教育やるのが許されるんだったら、先生をサンプルにしても同じ事だろう。」

「だいたい、何であなたがここに現れるのよ。」

「孝弘にな、また何か危なそうになったら、こつそり電話するように言っておいたんだ。ポケットの中のスマホで、呼び出しをするくらいは簡単だからな。どちらも声を出さなければ、この会話が外に流れていても、誰も気づかないだろう。まさか先生が先頭に立って、孝弘を裸にするとは思わなかったけどね。」

研一は、愛美の着ているブラウスのボタンをひとつづつ外しながら、平然とした顔で会話を交わしている。

手首を縛つてあるので、腕から抜き取ることは出来ないが、ブラジャーと一緒に、手首近くまでたくし上げる。

スカートとショーツを足首まで下げると、右膝の裏側に別のザイルを通し、そのザイルを愛美の首の後ろ側に回してから左膝に絡める。

そして、その後で足首の拘束を解くと同時に、膝のザイルを絞り上げる。

先週に続いて、再び愛美はM字開脚の姿にされてしまう。

「さてお前たち。こつちに委員長より良いサンプルが登場だ。こつちは触っても何しても良いぞ。」生徒たちの大半が、その言葉に釣られ、教壇の方に集まる。

隆二たちも、怜華の薄暗いスカートの中を覗き込むよりは、愛美の大きく広げられ、細部まで観察出来る女性器の方に惹かれたようだ。

「どうだ、良く見えるか。それじゃ、性教育の続きだ。」

研一はそう言うと、黒板にチョークで何かを書き始めた。

三日月のような形が、二つ向かい合って上端と下端でくっついている。

その上端の結合部分と、下端のさらにちよつと下に、×印を書き込む。

「これが、何の形かは解るよな。この三日月形のピラピラが大陰唇と小陰唇って呼ばれてる。

まあ、唇にちよつと似てるからな。そして、この絵の真ん中が赤ん坊が出てきたり、その種を送り込んだりするおまんこの穴、腫っていうやつだ。ちんこが入ったり、赤ん坊が出てきたりするんで、他の穴よりも伸び縮みするようになってる。そして、この×印は、おしつことうんこの出てくる穴だ。」

「うんこの穴、肛門は見てすぐに分かるだろうけど、おしつこの穴は、なかなか分かりにくいんだ。そして、そのおしつこの穴のすぐ上には、女の大事な部分がある。クリトリスと言って、セックスなんかで気持ち良くなる時に、一番感じるところだ。よく見てみな。豆粒のような出っ張りがあるから。」

「男の場合は、ちんこが一番感じるところで、二番目なんて無いけど、女はひとそれぞれで、ここが一番感じる人も居れば、穴にちんこが入ってくる時の方が、感じる人もいるし、おっぱいの先っぽ、乳首をいじられるのが快感って人も居る。」

「その刺激も、優しく指先でいじられるのが好きっていうのも居れば、ちよつと痛いくらいに噛まれるのが良いっていう女も居る。どこをどの程度に刺激してやるか、相手次第だな。」

「この先生の場合は、どこが一番感じるか。誰か試してみたい奴は居るかな。指でいじっても、舐めたり噛んだりしても、穴にちんこを突っ込んでも、何してもかまわないぞ。」

先週、隆二が実際にセックスをしてしまったのだから、先生の体に対しての遠慮や怖れは減っている。

何人かの男子生徒が、愛美のクリトリスをもてあそんだり、膣に指を入れたりしはじめた。

おっぱいに興味を示し、指で乳首をつまんだり、舐めたりする者も出てくる。

愛美は、そんな刺激で快感に浸るわけもなく、無言で研一を睨みつけている。

先週に続いての、二度目の出来事なので、自分の体を生徒たちに晒す羞恥より、研一に強制されるという屈辱に対する反逆心が勝っていて、こんな屈辱的な格好にされてさえ、その勝気な性格は屈服や降伏など、考えもしないようだった。

「こんな事して私を責めてるつもり。生徒たちに裸を見られたからってどうなるものでもないわ。」

「ほう、顔に似合わず可愛くない先生だな。羞恥心よりも、負けん気の方が強いかな。どうしてやろうかな。」

研一はそう言うと、生徒たちの方に声をかける。

「お前たち、先生のあそこを眺めてるだけか。スマホとか、持ってないのか。動画でも撮って、記録を残しても良いんだぞ。」

さすがに、愛美も怯えた表情を浮かべる。

そんなものが一度記録されたら、ネットなどでどこまで拡がるか解らない。

自分の秘所が、世間一般に公開されてしまう可能性もある。

生徒たちは、喜んでそれぞれのスマホなどを取り出し、思い思いの角度で、この状況を記録に残している。

どこからか

「委員長も撮って良いですか。」

という声も上がる。

素直にそんな質問をするあたりは、まだ中学生だからだろう。怜華はその声に、

「止めて。嫌っ。」

と、泣き叫ぶ。

「どうしようかな。ちょっと可哀そうな気もするが。」

研一は、ちよつとためらう。

「まあ、どうするかはお前たちに任せるよ。でも、この委員長さんも、なんだかいじめっ子のような感じだから、こういう画像を持つていれば、いじめられそうになった時に抑止力になるかもしれないな。」

そんな研一の声を目にして、数人の女子生徒までが、怜華の秘所を狙うようにスマホを向け始める。もちろん、その中には石井有希の姿もある。

中にはスマホのライトで、スカートの中を照らそうとする者さえ出てくる。

怜華は、精一杯体を縮め、なるべく皆の視線とスマホのカメラを避けようとしている。

だが、愛美は、相変わらず研一を憤怒の形相で睨んでいる。

「出来の悪いアダルトビデオでもあるまいし、いまどき女教師ものなんて、腐るほどあるわ。ネットでは、無修正とかの画像も沢山出てくるって言うし、こんなもので私を脅しても、無駄よ。」

「ここまでされても意地を張るかい。許してくれって泣けば、こつちもそれなりに考えたんだけど。もつと厳しいお仕置きをしなきゃ、駄目なようだね。」

研一は、そう言うど、ザックの中から何かを取り出す。

5・いちじくの洗礼

「これが何だか分かるかな。」

そう言うて、研一が愛美の目の前に突き付けたのは、薄紫色の手のひらに乗るくらいの箱だった。

そこには、「イチジク浣腸」という文字が書かれている。

「か、かんちよう。」

さすがに愛美も、こんなものが出されるとは想像もしていなかった。

「そうだよ。イチジク浣腸ってやつだ。何に使うものかは、知ってるかな。」

「それは、便秘の時に使う薬でしょう。」

「正解。これを今から先生に使ってみようと思ってるんですよ。」

「そんな。」

この時点でも、愛美の心に研一に対して許しを請うという気持ちは無かった。

運命は皮肉なもので、愛美はどちらかと言えば下痢体質だったので、知識として、浣腸というものは知っていたが、実際に体験した事がなかった。

過去の経験と言えば、猛烈な便意に襲われ、便を漏らしそうになったような事が多く、運動選手だった頃の、大会への移動のバスの中で、誰にも悟られないよう、一人で便意に耐えた経験や、授業の終わるチャイムまで堪えたことなど、我慢をして、それを克服した経験ばかりだった。

あの程度の大きさの家庭用医薬品だ。

便秘治療として便意を誘発するのだろうが、過去の経験からすれば、ひたすら耐えることで、その便意も克服できるものだど、思っていた。

周囲で見ている生徒たちも、様々な反応を見せている。

浣腸というものを、まったく知らない生徒も居る。知識はあるが、実体験は無い者も多い。

そして、実際に浣腸をされた経験を持つ者も居る。

それが、排泄を誘発させる薬だという認識はあっても、それぞれの描くイメージは違っていた。

しかし、もしもこの場で先生が排泄行為に及ぶなら、それは惨劇だということには、誰もが思い至った。

教室の中央の机に拘束された怜華の耳にも、愛美がどんな扱いを受けているか様子はどうかがえた。

直接、そちらを見ることは出来なくても、聴こえてくる会話や、他の生徒たちの様子などで、状況は伝わってくる。

「かんちょう。」

という愛美の声と

「これを先生に：：」

という研一の声に、思わず身をすくめる。

実は、怜華は、以前何度か便秘になった事があり、母親からイチジク浣腸をされた経験もあった。

最近の経験は、小学校の高学年の頃だった。たとえば母親と言っても、お尻を見られたりするのはずかしい年ごろだ。もう初潮があつた後だった。

お尻の穴を掘げられ、そこにイチジク浣腸の先端を突き刺され、薬液が体内に流れ込んでくる不快な感触は、まだ記憶に残っている。

母親から、

「我慢するのよ。」

と言われ、浣腸された姿勢のまま、布団の上で我慢をさせられた。

自分でもそのつもりで耐えているのに、薬によつて引き起こされる便意には勝てず、最終的には、半べそでトイレまで急いだ、あの屈辱感も忘れてはいない。

あれを、先生が受けるんだ。先生は、あの苦痛に耐えられるのだろうか。

自分の経験した記憶を再現させる不安感で、怜華の想いは乱れた。

この時点でも、愛美がくじけないと知り、研一は、周囲を取り囲む生徒たちを見まわす。

その中に、隆二の姿を見つけると、研一は隆二を手招きする。

「この前も、先生とセックスするサンプルになつてくれたから、今度は、先生にこれをしてやつてくれないかな。」

そう言うと、箱の中のイチジク浣腸をひとつ取り出し、包装を破つて、隆二に手渡す。

隆二は、渡されたものを眺めて、しばし躊躇う。

「やり方は簡単だ。そのキャップを取つて、尻の穴に差し込む。後はそれを押しつぶすだけだ。薬が腸の中に入ってしまったら、差し込んだものを抜いて、薬が効くのを待っていれば良いんだ。」

愛美の脳裏では、様々な葛藤が渦巻いていた。

ここで、研一に全面的に降伏して、泣いて許しを請えば、浣腸されることは免れるだろうか。

実行役の隆二に対して高圧的に出れば、研一の指示を実行しないだろうか。

それとも、浣腸の薬効に耐えてみせるか。

それにしても、この状況はどんなふうになるのだろうか。

授業時間が終われば、本来ならホームルームの時間になる。

放課後になってまで、このクラスの生徒だけが教室に閉じこもっているのは、周囲で異常を察知するだろうから、研一もそこまで長引かせることは出来ないだろう。

手足を縛られ、体を開かれ、生徒たちに弄られているのにも、いずれ終わりの時間が来る。

それまでは羞恥の感情や便意の苦痛など、じつと押し殺して、石のようになっていれば良いのだ。

隆二に対しての威圧は試みるとしても、研一には屈服したくない。

愛美は、そんなふうに考えていた。

隆二は、ためらっていた。

研一からのプレッシャーを考えると、指示を拒否するのは難しい。

「柿沼くん。私にそんなことをしたら、どうなるか、解かっているでしょうね。」

愛美の口調は、あくまでも平静だったが、その形相と視線は、隆二をすくませる。

だが、愛美はザイルで縛られて、身動き出来ない状況だ。

一方で、研一は自由であり、その手にはナイフもある。

先週、首をつかまれた腕力や、愛美を失神させた技などを思うと、逆らうのは得策ではない。

研一の様子を伺うと、言葉は発しないが、その視線は強い力で、

「やれ。」

と言っている。

隆二は覚悟を決めた。

「柿沼くん、やめなさい。」

愛美の言葉は、もう隆二の耳には響かない。

隆二は、手にしたイチジク浣腸のキャップを外し、左手の親指と中指で愛美の肛門を広げ、その中心に見える肉色の菊の花びらのような形の穴に、それを挿しこんだ。

愛美は、肛門の違和感に怯えた。

イチジク浣腸の先端だから、ストロー程度のものだろう。

挿入されても、痛いという程のものではない、
だが、今までそんなところに侵入されたことは、生まれてから一度もない。
過去の男性経験では、秘所にペニスを入れられたり、指でかき回されたりと、様々な事をされてきた。

中には肛門に興味を示す男も居たが、愛美はそれを拒絶してきた。

せいぜいが、指先で肛門を撫でられる程度だった。

それよりも奥まで異物が挿入されるという感触は、未経験だ。

「しつかりと、根元まで入れたかな。」

研一は、笑うように隆二に確認する。隆二は、無言で頷き、

「やめて！」

という、愛美の叫びと同時に、浣腸の球体部をぐっと押しつぶした。

イチジク浣腸の中の液体は、そのほとんどが愛美の直腸の中に注ぎ込まれてしまった。

愛美は、今まで経験したことがないその感触に、不安を覚える。

生まれて初めて、肛門から腸の中に向かって液体が注入されたのだ。それが、こんな不快な事だとは思っていないかった。

手にすっぽりと隠れてしまいそうな小さな容器の中のわずかな薬液だと侮っていたのかもしれない。

そんな後悔が頭を過ぎる。

教室内の全員が、事の進行がどうなるのかを、黙ったまま見守っている。

数分の経過で、愛美の表情は苦痛に歪み始める。

想像していた以上に、浣腸による便意は厳しいものだったのだ。

しかし、まだ愛美は、これを我慢しきれば、やがて波が引くように、便意も治まるものだと思っている。

研一は、その状況を黙って見守っていたが、愛美が屈服することがなさそうなので、さらにこんな

事を言い出した。

「ところで、この箱って二個入りなんだよな。もう一個を残しておいても仕方ないから、これも使っちゃおうか。」

そう言っつて、もう一つのイチジク浣腸を、さつきと同じように隆二に手渡す。

「これを…」

「もう一本、先生に入れるんですか。」

「柿沼くん、やめなさい。」

愛美は、憤怒の形相で隆二を睨む。

「お願い、もう入れないで。」

隆二に対する口調が懇願しているようになる。

隆二はためらい、研一の方を振り返る

「どうしても、これも使うんですか。」

それに対して、研一はこんなことを言い出す。

「そうだな。せつかくだから誰かに使わなきゃ無駄になっちゃうよな。」

「じゃあ、先生に。」

「まあ、どうしても先生じゃなくても良いけどね。自分にしても良いし、別の誰かでも良いよ。この教室には、パンツを履いてない剥き出しの尻が他にもあるしな。」

その言葉で、隆二は怜華の事を思い出す。

そちらを振り向くと、あのままの姿で、机に縛り付けられたままだ。

怜華は、その言葉に恐怖を覚える。まさか、浣腸のターゲットにされるなんて。

単に裸を晒すより、秘所を見られるより、数十倍の羞恥の行為だ。

そして、こうやって縛られたままで、便意の限界を迎え、排泄行為までも見られたりしたら、もうクラスメイトとは顔も合わせられない。

隆二は、ためらいながらふらふらと怜華の方に向かう。

「来ないで。そんな事したら、一生許してあげないから。」

その叫びで、隆二は思い直したように、足を止め、教卓の愛美の方を振り返る。

愛美も、隆二に向かって叫ぶ。

「お願い、もうやめて。これ以上お薬を入れられたら、我慢できなくなっちゃう。」

隆二はためらいながらも愛美の太ももに手を掛けるが、愛美に睨まれ、再び怜華の方に向き直る。

これ以上では我慢出来ないのなら、このままなら我慢出来るという事なのだろうか。

もう一本は、愛美でなく怜華にした方が良さだろうか。

そうすれば、どちらも一本ずつ、浣腸をされることになる。それが公平かもしれない。

そんな事をあれこれと思いながら、隆二は再び怜華に向かう。怜華は、

「やめて。やめて。」

と泣き叫ぶばかりだ。

さつき、スカートを扇いでいた時の嗜虐的な感覚が蘇る。

これだけ怜華をいじめてやれば、二度と逆らったり馬鹿にしたりは出来ないだろう。

それに、肛門に浣腸を突き立てるということは、スカートの陰の薄暗い女性器を覗くよりも、もつと間近で、露わになった怜華のあそこを見ることが出来る。

隆一はそう考えると、怜華の太ももの上のスカートを、一気に捲り上げた。

陰毛が生えた恥丘と秘所が、皆の目に入るようになる。

先週目にした石井ちゃんの秘所に似ている。

愛美のように黒々とした陰毛が生えそろった恥丘に比べると、まだいくらかまばらな茂みで、陰部も陰唇がぴたりと閉じられ、未使用未開封といった風情なものも有希のモノを見た時と同じようだ。

愛美のそれは、先週も隆二のものを受け入れたし、それ以前にも、何度も使われているようで、陰唇も綻びかけた花びらのようだ。

隆二は、怜華の秘部を眺めて、そんなことを思った。

その秘部の少し下には、怜華が必死で閉じようとしている尻肉があり、それを指で押し広げると、その奥には菊の花のような肛門が現れる。怜華は、

「ダメ。やめて。お願い。」

と言葉を出すのと、首を横に激しく振ること以外、抵抗が出来ない。

隆二は、膝を押し上げるようにして、肛門の位置を確認すると、そこに、手にしたイチジク浣腸を突き立てる。

隆二のすぐ脇まで、スマホを持つ手が伸びる。

怜華の秘所も菊座も、そしてそこに挿入されるイチジク浣腸の様子も、アップで捉えている。

隆二が、その手の主をちらつと見ると、それは石井有希だった。

先日の復讐の想いも有るのだろう。

隆二は、贖罪の気持ちも湧き、あえてそれを邪魔しなかった。

怜華は、中学生の女の子にしては過酷すぎるような羞恥の行為に、涙を流すが、縛られた体では逃れようもない。

隆一は、二本目の浣腸液を怜華の腸の中に、一気に流し込んだ。

怜華は、その流れ込んでくる液体の感触で、背筋が凍るような思いだ。

それがどんな結果をもたらすものなのかは、充分に承知している。

一刻も早くトイレに駆け込んで、誰にも見られない場所で、その結果を体から出さねければ、どうなってしまうのか。

だが、それにはこの縛られたザイルを解いてもらわなければならないのだ。

絶望的な状況の中で、怜華はこの先の展開に怯えた。

「ああ、委員長さんにやつちやったのか。」

研一は、あきれたような声を出す。

「まあ、俺がそんなことを言ったのも悪かったが、お前、一生その子に恨まれるぞ。」

「それから、うんこの片付けが二人分になる。お前が入れたんだから、出たモノの片づけはお前がしろよ。」

その言葉に、クラス中に騒めきが広がる。

そもそも、浣腸されればトイレで便を出すものだし、教室の中で、縛られたままでの排泄など想定外だ。

だれも排泄物の片付けまでは、考えても居なかったのだろう。

先生の女性器を写している者たちも、怜華の秘所を改めて撮影する者も、この先に、もつとグロテスクでセンセーショナルなシーンが待っていると思ひ、手にしたスマホを改めて握りしめた。

「ところで、お前は、先生とセックスしたり、二人に浣腸したり、美味しい役回りばかりだな。」

研一が、隆二に向かって言う。

「そもそも、お前が孝弘を脱がせたのが事の始まりだったのに、ちよつとパンツ脱いだ程度で、お仕置きが甘すぎたよな。」

そう言うと、隆二を捕まえて椅子に座らせ、ザイルで後ろ手に縛ってしまふ。

足も椅子の脚に結び付け、じたばたしても、椅子から離れられないように拘束する。

「せつかくの特別待遇だったから、今回も特別席に座らせてやろう。」

隆二を椅子ごと教壇に運び、愛美の縛られている教卓の前に横にする。

愛美は教卓に縛られ、尻や陰部が教卓の端からはみ出すようなポジションなので、その下の床に、隆二の体が横たわっていることになる。

椅子を下にして手足を縛られて横にされているので、逃げるにも逃げられない。

これで愛美が排泄に及んだら、その結果は隆二に降りかかるような位置関係だ。

「ここなら、先生がうんこするのを、一番近くで見れるぞ。まあ、出ちゃったらそれがお前の顔や体に降ってくるんだけどな。嫌なら、先生に我慢してもらって、うんこなんかしないでくれるように願ってみるんだな。」

「冗談じゃない。勘弁してくれよ。」

「うん、冗談でやってるわけじゃない。誰かをいじめるっていうのは、実はこういう事なんだ。やった方はただの冗談のように思っても、やられた方はとことん嫌な思いをする。まあ、そんな事の罰だな。嫌なら、先生に出さないでくださいって、お願いして、お祈りでもしてみるんだな。」

研一と隆二が、そんな会話を交わしてる間にも、愛美の限界が迫ってきている。

愛美は必死の形相で、歯を食いしばり便意に耐えているが、顔は青ざめ、太ももや肛門周辺には鳥肌が立ち、今にも肛門が崩壊しそうな様子だ。

そして、ついに強情だった愛美の心も折れた。

「もうダメ。許して。出ちやう。見ないで。」

そう叫ぶと同時に、腸の内圧に逆らえず、肛門が火山の噴火口のようにせり出し、その先端から飛沫が迸る。

その後に続くように、腸の中でこの時を待っていた便が、一気に噴き出してきた。

その飛沫と便は猛烈な勢いで発射され、隆二の上半身に落下する。

それに続くように、泥状の便が噴出する。

「きやあ。」 「うっ。」 「すげえ。」

生徒たちから様々な声が出る。

肛門は、まるで愛美とは異なる意思を持った単独の生物のように、ひくひくと蠢きながら、次々と腸の中のものを吐き出し続ける。

クラス全員の視線と、何人かの構えるスマホのレンズの焦点で、愛美の排泄は、数十秒から数分ほど続き、噴き出した便を、教壇と隆二の体の上にまき散らした。

だからだと流れ出していた軟便もやがて尽きて、肛門が閉じて便が途切れたかと思うと、肛門の括約筋の弛緩と同時に、尿道口も弛緩したのだろう。

ちよろちよろと尿までも噴き出してくる。

排泄が終わっても、愛美はその屈辱と羞恥で、静かに涙を流している。

便意の苦痛から解放されて、脱力状態でもあり、羞恥の極限まで与えられて、何も反応出来ないようだ。

その惨状に、研一を含め教室内の全員が、凍り付いたような静止状態におちいる。

その中に、

「もう許して。誰か助けて。お願い、トイレに行かせて。」
というすすり泣きに混じった怜華の声だけが響く。

研一はふと我に帰り、誰にともなく告げる。

「おい。先生と委員長をほどいてやれ。それから、そのクソまみれの奴もな。」

数人の生徒がその声に応え、愛美と怜華の方に向かう。

だが、怜華の腸の中で暴れる便意は、限界を越えようとしていた。

怜華を解放しようとして、数人がザイルを解こうとする前に、怜華の肛門は限界を越え崩壊した。

「やだ。ダメ。」

悲鳴が響く。

自分の体の一部である肛門を、自分の意志でコントロールすることが不可能になり、羞恥の塊を産みだす瞬間の断末魔であった。

愛美と同じように、飛沫が迸り、固形の便が続き、さらに半固形上の泥のような便が続き、縛り付けられた机の上、制服のスカートの尻の部分、両の太股の間にこんもりとした山を作っていく。

肛門が便を流し出すのとシンクロするかのようには、怜華の口からは嗚咽がこぼれ、その目からは涙が流れ続けていた。

しかし、石井有希を始めとする数人の生徒の構えるスマホは、怜華のその惨劇の一部始終を明確な記録に残していた。

教室内には、便臭が漂い、惨状を別の感覚からも証言していた。

その惨劇は、教室内の全員の目を引き付け、それを目撃した者の心に大きな衝撃を与えた。

研一でさえ、怜華に降りかかった悲劇の大きさには、意図していた以上の衝撃を覚えていた。

その凍り付いたような空気の中に、終業のチャイムが鳴る。

授業が終わり、そのままホームルームに入る時刻の合図だ。

愛美は、拘束を解かれた後も、脚を下ろし膝を閉じた姿で、教卓に横たわっていた。

この先に、担任教師としても、一人の女としても、どうすれば良いのか、考えられない状態なのだ。

ろう。

怜華も同じように、身動きできない状況だが、こちらは精神的なショックに加えて、下手に動けば自分の排泄物が拡がったり、自分の体や衣服に付く怖れで、動くことが出来ないのもある。

研一は、誰にもなく指示を出す。

「うんこの片付けは、さつき言ったようにそいつにやらせればいい。」

そして、愛美に向かって、こう告げる。

「こんな臭い空気の中に居たんじゃ、孝弘が体調を悪くするかもしれないから、今日は早退させて連れて帰るよ。こんな事になったのも、あんたが蒔いた種、身から出た錆だろう。いや、この場合、身から出たクソかな。」

その言葉に、何人かの生徒たちはクスリと笑う。

研一は孝弘を帰るように促すと、ドアを開け、振り返ることもなく、教室に背を向けた。

エピソード

もちろん、学校内でこのセンサーショナルな事件は知れ渡ったが、校長以下管理職は、事なかれ主義を貫き、何も無かった事にして、事件の幕引きを図った。

愛美と怜華は、その後二度と学校に足を踏み入れることはなかった。

愛美は、事件の数日後に、郵送で退職届を出し、この街から居なくなった。

担任する教え子達に、羞恥の全てを見られた屈辱に耐えきれなかったのだろう。

行き先を知る者は誰も居ない。

怜華は、夏休み中に自殺未遂事件を起こしたという噂も流れたが、夏休みが終わった頃に、こっそりと転校していった。

なんでも、他県の全寮制の中高一貫の女子校に入ったという噂話だ。

隆二は、もういじめをすることもなく、不良グループでは三枚目の役割になっている。

「俺は先生とヤツた男だからな。」

と言うと

「お前は、先生のクソを浴びた男じゃねえか。」

と言われるのが、彼らの中での定番のお笑いだそうだ。

愛美と怜華の秘所と排泄シーンを記録した動画は、歴代の生徒に長く受け継がれているという。

